



林業試験場の名残^{なごり}漂う 豊平公園(札幌市)

森林インストラクター
小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

交通量の多い札幌市豊平区の国道36号線。そこから少し入った場所にあるのが豊平公園です。地下鉄東豊線の豊平公園駅を出ですぐ。電車に乗れば、初めての人でも迷うことはありません。

1977年、国の林業試験場が羊ヶ丘に移転した跡地に誕生しました。そのため、花木園^{かぼくえん}や野草園^{やそうえん}、芝生広場に加え、試験場時代の高木^{こうぼく}が残り、バラエティ豊かな自然が楽しめます。「緑のセンター」には温室のほか、

相談コーナーや図書コーナーもあり、知識を深めるための態勢も整っています。

周辺にはかつて墓地や火葬場がありましたが、街並みが大きく変貌^{へんぼう}し、その面影はありません。

夏を彩るアジサイ

表通りに面した「緑のセンター」脇を奥へ進むと、シラカバ林が見えてきます。その一面を取り囲むように植えられているのがアジサイです。市内の公園でも



広々とした芝生広場



手まりのようなアジサイ



右側がアジサイの花。左側が装飾花

屈指の規模を誇っています。7月上旬になると、白いシラカバ林を背景に青い花が咲き始め、そのスケールと美しさに魅了されます。

手まり状の外側はがくが変化した装飾花で、昆虫を呼び寄せる役目を担っています。本当の花は装飾花の奥にありますが、小さく隠れているので目立ちません。中をのぞいてみると、花卉や雌しべ、雄しべを確認することができます。

アジサイは青い花の集合体を意味する「集真藍」が変化したといわれています。日本原産の園芸品種で、中国を経由し18世紀末、欧州に渡り、品種改良が繰り返されました。土壌の酸性度が強い日本では青くなり、アルカリ性が強いヨーロッパでは赤くなります。

アジサイの葉は大きく光沢があることから、飲食店で料理の飾りとして出されることがあります。2008年、それを食べた客が吐き気やめまいなどの食中毒症状を起こしました。このため、厚生労働省は葉を提供しないよう業者に注意喚起しています。

公園にはこのほか、装飾花が花の周りに額縁のように並ぶヤマアジサイ、葉がアカガシワ（アカナラ）に似ていることから名付けられたカシワバアジサイなども植栽されています。

咲き誇る珍しい花木

7月中旬から開花するのが、花木園の中央にある2本のモクゲンジです。中国原産で、枝先に黄色い花が円錐状にたくさん付きます。散るときには、金色の雨が降るように見えることから、英名はゴールデン・レイン・ツリーといえます。花は黄色の染料にもなりません。



花が黄色で鮮やかなモクゲンジ

秋になると、ホオズキのような袋状の果皮の中に、黒い球形の種子ができます。これを数珠にして念仏を唱えると、極楽浄土に行けるといわれたため、かつては寺院によく植えられていました。

種子は固くて食べられませんが、小動物や鳥が持ち去るのでしょうか。少し離れた場所に、この種から育ったとみられる幼木を発見することがあります。

花木園には、ほかにも珍しい木が植えられています。モクゲンジの東奥にあるのがハンカチノキ。5月中旬に咲く白い花がハンカチに見えることから、この名が



木の上方に咲くハンカチノキ

付いています。でもこの白いのは、花の集まりを保護する特殊な葉で総苞片そうほうへんといいます。2枚の総苞片の中心にある球状の塊が花の集合体です。総苞片は白いハンカチが垂れ下がるような優美な形をしています。

さらに、その奥にあるのがヒトツバタゴ。6月上旬、開花すると白く細長い花弁が四方に開きます。本州中部に自生していますが、昔はこの木の正体が分からず、ナンジャモンジャの木と呼ばれていました。秋になると実が黒っぽく熟します。

一方、野草園は春先、色とりどりの草花が咲き乱れます。4月中旬、真っ先に開花するのが黄色いフクジュソウです。下旬には、交代するようにカタクリとエゾエンゴサクが一斉に花開きます。

カタクリは花びらが反り返るのに対し、エゾエンゴサクは筒状で下向きです。色はカタクリが紅紫、エゾ



野草園のカタクリとエゾエンゴサク

エンゴサクが青紫。この形と色のコントラストが美しさをさらに演出しています。

いずれも早春に開花するのは、生息地の上の木々に葉が茂り、林床に光が届かなくなるのを避けるためです。

公園の北西側には道立総合体育センター（愛称北海きたえーる）が隣接しています。その裏手に低木のエゾノコリンゴが植えられています。興味深いのは、そこにヤドリギが生えていることです。普段見かけるのは高木のため、間近で観察できる貴重なスポットです。

落葉樹につく半寄生はんきせいの常緑樹で冬も枯れません。秋になると、淡黄色の実を付けます。果肉は粘液質に富んでおり、実を食べた鳥が木の枝に糞ふんを落とすことで繁殖します。枝は二股に分かれながら鳥の巣のような丸い形状に成長していきます。

墓地は体育センターに

道立総合体育センターにはかつて豊平墓地がありました。周辺に民家が増えたことで、移転を余儀なくされたのです。

札幌で最初に墓地ができたのは中央区の「あけぼのアート&コミュニティセンター」（旧曙小学校、南11条西9丁目）付近です。しかし、不便でほとんど使われませんでした。1877年には墓地の設置が届け出制となり、東本願寺北側に区民共葬墓地が開設されます。

1884年には墓地及埋葬取締規則が公布され、墓地は民家より60間（108m）以上離すと規定されたことで、札幌区は1886年に豊平村の土地払い下げを受け、豊平共葬墓地を造成します。



墓地の跡地に立つ体育センター

その後、田畑だった墓地の周辺に住宅が建つと、風紀や治安の悪化を危惧する住民から移転の要望が強まります。1961年には豊平墓地移転の請願が市議会で採択されました。

しかし、実現には長い歳月を要し、全面移転の方針が決まったのは1980年。1982年から87年にかけて、約5200の墓を里塚霊園に移します。市外の墓主には遺骨の撤去と埋葬の際、立ち合うための旅費を2回分負担するなど、1基平均で約100万円を要しました。

跡地に建設された総合体育センターは2000年に開館します。隣が公園で周辺が住宅街のため、圧迫感を与えないよう、アリーナを地下に配置し、鳥が羽を広げたような低層構造（地下1階、地上2階）にしています。

ここが墓地だったと分かるのは、センター前の広場に立つ記念碑です。バスケットボールのゴールをデザインしているので、施設に関連するモニュメントかと錯覚しますが、下にはしっかり「豊平墓地跡記念碑」と書かれています。



墓地だったことを記す記念碑

火葬場は中学校に

また、火葬場も都市化の波にさらされてきました。公園の南西側の豊平8条13丁目は戦前、火葬場でした。

札幌で初めて火葬場の設置が許可されたのは1876年。東本願寺北側の南6条西8丁目で個人が経営していました。1884年の墓地及埋葬取締規則で、火葬場は民家から120間（216m）以内にはあってはならないとされ1887年、豊平村に移転します。

その後、札幌の人口が増加するにつれ、火葬の需要は増大します。民営は好ましくないと、1905年には豊平村が買収、札幌区との共同使用とします。これにより、村の火葬収入は歳入の5割近くを占めました。

当時の使用料は特別上等5円、上等3円、中等2円、並等1円20銭の4段階に分かれ、燃料は特別上等がよく燃える木炭だったのに対し、上等以下はまきでした。

1910年にはこの地域が札幌区に編入されたことで区が火葬場を買収します。しかし、施設の老朽化に加え、臭気による環境悪化で、隣接する豊平町では火葬場移転期成会が発足するなど、廃止を求める「猛烈な運動」（「豊平町史」）が起こります。

札幌市会も移転の決議をしたことで1944年、平岸火葬場の開設に伴い、豊平火葬場は閉鎖されました。そして、平岸火葬場も里塚斎場の開設に合わせ1984年には廃止されます。

近隣住民に煙たがれた豊平火葬場。その跡地には1955年、八条中学が開校し、将来を担う子どもたちの勉学の場となっています。



かつて火葬場だった八条中